

本稿は、抄物としては比較的早い段階に成立した、桃源瑞仙『百衲襖』と柏舟宗趙講『周易抄』について、主に室町時代語資料の観点から研究したものである。

序章では、まず日本語史の中で抄物がどのような位置にあるのかを述べ、次いで抄物史の概略を述べて、本論への導入とした。

奈良・平安時代の日本語史料は、資料の性質が歌謡や識字層の手になるものに偏っている。院政・鎌倉時代になると、文章語と口頭語との隔たりが大きくなったため、口語の文献自体が少なくなる。南北朝時代は言語資料そのものの現存が少ない。そのような流れにあって、室町時代は、抄物・キリシタン・狂言史料によって、幅広く口語を復元することが可能である。その中でも抄物は、キリシタン・狂言よりも古く、現存する量が多い。キリシタン資料が音韻史料として重要であり、狂言資料がより庶民層に近い口語を記録していると見られる点と相補うものである。

抄物とは室町時代に盛んに編纂された、漢籍や仏典の講義の記録である。聞書はその時代の講義口調が反映しており、口語的な言葉、表現が混じているところから室町時代の口語資料として利用されてきた。特に十五世紀後半の文明年間は、抄物制作の初期段階に当たり、その時代に制作された抄物は「前期抄物」と呼ばれる。これまでも前期抄物への研究は行われてきたが、抄物の言語や抄物の成立をさらに究明してゆくためには、今後も引き続き前期抄物の研究が必要である。

第一章では、桃源瑞仙『百衲襖』の書誌学的・語学的考察を行った。

第一節では、文明 9 年（1477）に成立した抄物資料、『百衲襖』の成立・構成・書名の由来等について述べた。桃源の著した抄物に対しては、『史記抄』を始めとしてこれまでも研究の蓄積がある。しかし、『百衲襖』はこれまで十分に研究されてこなかった。本節では、まず『百衲襖』研究の基礎として、諸本のうちどの伝本に拠るべきかを考察した。現存冊数の多さから、京都・建仁寺両足院蔵本と京都大学付属図書館蔵清家文庫に所蔵される京大 23 冊本とを主に比較した。両足院本は 1 冊を欠くが、京大 23 冊本は完本である。両足院本は書風・紙質が京大 23 冊本より古く、振り仮名が多いが、京大 23 冊本は親本の虫損を反映したと思われる空白が両足院本より小さい。特に「虫損」反映箇所注目すれば、京大 23 冊本の方が両足院本よりも古い時代の書写かとも考えられる。しかし、虫損した文字をどの程度判読するかは、書写者に任される部分が大きく、先後関係の決め手にすることは難しいと考えた。その結果、両足院本を主に拠るべき本とし、欠巻や虫損箇所については他の伝本を適宜参照するという立場を取った。

また、「百衲襖」という書名は、元・胡一桂『周易啓蒙翼伝』所載の故事に由来することを明らかにした。「百衲襖」とは綴れ合わせの僧衣の意であるが、なぜ易の注釈であることと綴れ合わせの僧衣が結びつくのかは判然としない。これは、宋・朱熹が宋・朱震の『周易集伝』を評して、『集伝』は諸説の羅列に過ぎず、綴れ合わせの僧衣のようであると例えたことに由来している（『朱子語類』にも類話がある）。

第二節では、『百衲襖』の助詞ノ・ガの使い分けについて考察した。抄物では、固有名詞に主格・連体修飾格の助詞が続く場合、ノは聖人君子に用いられ、それ以外はガを用いるという使い分けのあることが知られている。ところが『百衲襖』では、朱熹という同一人物に対してノ・ガの両方が用いられている。『史記抄』に登場する漢の高祖に対しても、ノ・ガいずれもが用いられたことが知られている。ただし、高祖の場合は、帝王となる前には「沛公ガ」とガで待遇され、帝王となった後は「高祖ノ」に格上げされている。朱子の場合は、立身出世などにかかわらずノ・ガの両用されており、珍しい例であるといえる。使用例を見てみると、ノは「文公ノ」のように諡とともに用いられており、一方、ガは「朱子ガ」のように広く流布した敬称とともに用いられている。これは、諡に対してきわめて高い敬意が払われていたために起こった現象であろうと結論づけた。

第三節では、『百衲襖』に見られる語句や初出例のうち、現行辞書に記載のないものを紹介することで、『百衲襖』が語彙研究上有用な資料であることの一端を示した。『日本国語大辞典第二版』はその語が文献上もっとも早く見られる例を掲出することを原則とするが、『百衲襖』などの抄物を利用することで、さらに初出を遡ることができる。例えば、次のような語句である。

語	『日本国語大辞典第二版』の初出	左を遡る抄物の用例
あさって（明後日）	文明本節用集（室町中期）	『百衲襖』（1477）
くどい	玉塵抄（1563）	『百衲襖』
臭いものに蓋をする	俳諧・世話尽（1656）	『百衲襖』
身から出た錆	三体詩幻雲抄（1527）	『百衲襖』
わらべしい（童）	浄瑠璃・薩摩歌（1711頃）	京大本『周易抄』（講者不詳）
けむし（毛虫）	日葡辞書（1603～04）	桃源瑞仙『蕉窓夜話』

第四節では『百衲襖』が口語体を取ることに意識的であったことを示す記事を紹介した。抄物が口語体を取るのには、中国の宋・元の時代の俗語の講義録の影響を受けたためだと考えられている。それは蓋然性の高い推測ではあるものの、室町時代当時の言語観察記述によって裏付けられたものではなかった。桃源は『百衲襖』において、宋の朱子学者は好んで禅話を使い、禅話には「説話」、つまり口語が用いられている、と述べている。原典である『易学啓蒙通釈』には、宋代の中国語への客観的な反省はないから、桃源は、『通釈』からの受け売りではなく、独自の観点から中国の口語・文語の違いに注意を払っていたことが分かる。このような人物が日本語の口語・文語の違いには無頓着であったとは考えられず、桃源も抄物を著述する際に、口語を用いることに相当意識的であったらうと考えられる。

附節では、『百衲襖』の原典の一つ『易学啓蒙通釈』の序文を読むことによって、著者・胡方平の没年が元・至元 26 年（1289）であることを明らかにした。京都大学附属図書館清家文庫蔵『易学啓蒙通釈』（清原宣賢・業賢写）の序によれば、胡方平は「己丑」の年に亡くなっている。『宋史』巻 189（列伝 69）に、方平の子・一桂の伝を見ると、一桂は南宋の景定五年（1264）に 18 歳であったことが分かる。一桂の存命中の「己丑」は、元の至元 26 年（1289）で、一桂が 43 歳の時である。胡方平の没年齢は、生年が不明であ

るため、分からない。胡方平は、易学史上、決して無名の人物ではないが、この没年は未だ広く知られるには至っていない。

第二章では、柏舟宗趙・講『周易抄』の書誌学的・語学的考察を行った。

第一節では『周易抄』の成立および主に建仁寺兩足院所蔵本の書誌学的考察を行った。兩足院本の書写者を室町時代の同院住職・和仲東靖であることを明らかにした。兩足院本に書写者を明示する記述はないが、同院所蔵の和仲東靖書写本と筆跡が一致すること、兩足院本『周易抄』に和仲の号である「遁」が見られること、同時代に和仲が易学書を多く書写していることを根拠として書写者であると認定した。

また、『周易抄』に附載されている「周易要事記」についても考察した。その中の「易学伝授自何来哉」と題された中国の易学者の系譜、およびその日本版である「日本易学伝授」に記された人名は、いずれも12世紀後半の人名を最後とする。そして、「要事記」のいくつかの箇所に「亦庵按…」と桃源瑞仙の号で注釈が付されている。この2点から、「要事記」は12世紀後半以降に成立し、桃源瑞仙が注記を加えた後に『周易抄』に添付されたことが分かる。

第二節では、『周易抄』諸本が、語彙の異同によって二つのグループに分類されることを指摘した。これまで『周易抄』の諸本分類は、本文が一栢現震抄『周易抄』との取り合わせであるか否かで、原本系・増補本系のいずれかに分かれ、原本系は跋文の数によって、2跋本・1跋本・無跋本に分類されていた。2跋本は、語形の現れ方によってさらに2種に分類できる。例えば、兩足院本には、イカメシイ・ヤモメ・ヨッポド等の語形が現れるが、天理図書館・京都大学文学部に分蔵される一本にはやや語形の異なるイカメイ・ヤマメ・エッポド等が現れる。そして、兩足院本の語形は、兩足院本から直接・間接的に書写された伝本にしか見られない。兩足院本に特有の語形は『日葡辞書』に記載されていることから一般的な語形であるといえるが、原『周易抄』から見れば規範意識に基づく改訂を経た、新しい形であると考えられる。兩足院本からの転写本以外は、原本・増補本、あるいは2跋本・1跋本・無跋本のいずれであるかを問わず、基本的に天理・京大國文本と同じ語形を持つ。

第三章では『百衲襖』『周易抄』の注釈態度の異なりを比較する。桃源瑞仙と柏舟宗趙とは、ともに文明年間に近江国永源寺畔に居住し、易学をめぐって質疑や教授等の交流があった。このことは『百衲襖』『周易抄』の記事から明らかである。しかし、『百衲襖』の記述がそのまま『周易抄』に取り込まれたり、あるいはその逆のことが起こったりすることはなかったようである。したがって、二つの抄物はそれぞれ独立して生まれたことが分かる。『百衲襖』は博引旁証ゆえに必然的に長文となり、『周易抄』は要点主義のために簡潔であるということができよう。

また、今後の展望として、『百衲襖』『周易抄』を起点として、後代の抄物への影響、あるいは時代を遡って前期抄物の淵源を突き止める必要のあることを述べる。以下の附章は、その試みである。

附章一は、京都大学文学部国語学国文学研究室所蔵の写本『兩朝三百首』（請求番号「国

文学 || Tg || 8) の解題である。

京都大学蔵『両朝三百首』は、抄物資料の一つ『中華若木詩抄』の一伝本であり、室町時代後期～末頃に書写されたと推定される。『中華若木詩抄』は、室町時代の日本語史料として早くから注目されてきたが、写本の影印は今回が初めてとなる（写本の翻刻、および古活字版・整版本の影印が行われたことはある）。『両朝三百首』は上巻のみ存し、しかも本文の一部が欠けているという欠点を有する。しかし、『中華若木詩抄』成立時からさほど隔たらない頃の書写であり、かつ、上巻の写本が西荘文庫旧蔵本（新日本古典文学大系底本）と本資料しか現存しないことから、高い価値をもつと言える。

『両朝三百首』と西荘文庫旧蔵『中華若木詩抄』とを比較すると、細かな点に関しても類似するが、一方、古活字版・整版と対立することが多い（亀井孝編『語学資料としての中華若木詩抄（校本）』（1977年、清文堂）の校異による）。

『両朝三百首』の漢詩に施された和訓・漢字音等の訓点は、寛永十年版本と比較すると、簡略であるなど異なる点が多い。顕著なところでは、『両朝三百首』の「使・教」がシテ～シムと再読するのに対して、寛永版本ではシテを補読して「使・教」がをシムとのみ訓読する、という違いがある（西荘文庫本を翻刻した新日本古典文学大系の本文は、校注者が訓点を新たに付しているので比較対象とすることができない）。

附章二では、鎌倉時代語資料である『却癡忘記』を調査したところ、「自分」「なんぞ（副助詞）」「きらふ」の3つの語について、従来の辞書の記述を改めるべき点を見出した。

『却癡忘記』は、高山寺の開祖・明恵房高弁（1173～1232）が生前語ったことがらを、その没後の文暦二年（1235）以降、弟子の寂恵房長円（生没年未詳）が書きとどめたものである。

〈おのれ〉の意を表す「自分」の散文における初出を、従来の説に基づく室町時代（節用集類）ではなく、『却癡忘記』に遡るべきだと考えた。次の用例である。「恐経年序廢忘故、為自分記之。〈御詞上アケテ書之／私詞サケテ書之〉」（上1オ）従来、「自分」が文献上初めて現れるのは平安時代の漢詩とされており、散文の例はさらに下って『文明本節用集』や『温故知新書』などの室町時代の節用集類とされていた。『却癡忘記』の例は散文であるから、『文明本節用集』を200年ほど遡ることになる。

例示を表す副助詞「ナンゾ」の初出は、室町時代の抄物（『史記抄』）から『却癡忘記』にまで遡ると考えた。「アフラサハクリシテハ紙カナソニテカナラス手ヲノコヒテ文ヲサハクルヘキ也。」（上2ウ）これも初出を200年ほど遡ることになる。

マイナスの語感を伴わず、中立的に「選ぶ」意で用いられる「キラフ」は、従来、室町時代の御伽草子『文正さうし』が最古例とされてきたが、『却癡忘記』にすでに見える。「又惣テ師範ヲハ、能々先徳ヲキラヒテ、クワウリヤウニ左右ナク依府スヘカラス。」（上9ウ）これは初出を200年以上遡ることになる。